

今期4年11月11日発行 巻数/第77巻第11号(毎月10日発行) 昭和21年7月22日第3種郵便物承認

春燈

2022 November

11月号



久保田万太郎の句

枯野はも縁の下までつぐきををり

『草の丈』昭和二十七年

瀟条とした枯野が垣根を越え、わが身の下まで及んでいる。「病む」と前置があるが三田小山町の御自宅での病臥の夢であろうか。影をかかえた山家風景ととらえる。

微かに不安感が漂うのは芭蕉の辞世〈旅に病んで夢は枯野をかけ廻る〉を連想させる為か、最初の妻、京さんの服毒自殺されたのは先年のこと。静かに孤愁をかみしめている。繊細で、陰翳の深い句である。

西川 保子

久保田万太郎の句

かたまりて咲きて桔梗の淋しさよ

『草の文』昭和二十七年

この俳句に出会い、初めて私も作句したいと思った句である。これをきっかけに、春燈に投句したのを覚えて
いる。

万太郎に限らず死というものは心の切替えに影響を及ぼすことを、私達は無意識のうちに感じている。愛する人を亡くし、逆縁の淋しさをも味わった万太郎の心髄に迫るものがあると、この句を見ると思う。

横山さくら

名誉主宰 安立公彦

主宰 鈴木直充

新涼や夕づく木々に力満ち

露けしや村に一つの橋もまた

仲秋の百花を愛づる園生かな

本家の爺刀豆どさと置きゆけり

灯火親しけふ終戦の日なりしや

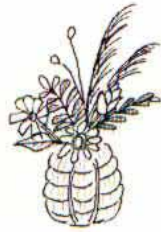
陋屋に棲着くらしき秋の蠅

秋澄むや遠き鉄塔雲を呼ぶ

かなかなや山を掴んで立つ檜

ゴーヤー棚仰ぐ夕べや身も寛に

かまどうま灯下を蹴つて闇に入る



当月集

鈴木直充選



○ 土江比露

青蜥蜴乾ききつたる墓の間を

炎昼の杭の影濃く湖平ら

火の帯を流す湖大夕焼

遠花火藁の間に浮かびけり

駒形に友と囲みし泥鰌鍋

○ 辻泰子

虫の音や一番電車の来る頃か

出撃前の笑顔の写真翳雲

原爆忌無数に並ぶパイプ椅子

廃業の風呂屋の引戸赤のまま

ぢぢばばの代理で島の敬老日

○ 坂本依詠子

眼を病める友の訃報や秋簾

やるせなさ晴らす風船葛増え

人生のテーマは無常秋の風

若い気の漲つてゐるマスカツト

雲百態色づき初むる稲穂かな

○ 小林文良

頑張つて小魚たたく冷し汁

今朝秋の風を見てをり埴輪の眼

処暑の声熱き珈琲淹れるべし

虫籠や夕べの調べおのづから

涼新た並木の藪で手繰らんか

○ 立竹人

紅蓮にあらがふ風もなかりけり

泳ぎきし少年は日を背負ひたる

水琴窟竹筒で聴く秋の音

木々の間の日は矢となりぬ秋の蟬

木々の間の日をそれぞれに秋の蟬

春燈の句

鈴木直充選

風落ちて背山前山星月夜

兵庫 秋山 薫

みんなの羽美しく命尽く

寝しづまる村里白し星月夜

観音堂出づれば頬に秋の風

空澄むや手帖に記す商談日

星月夜指踊らせてチエ口奏者

爽涼やパン屋に並ぶ人の列

鱗雲仕舞ひしままの旅靴

蜉蝣の群飛ぶ水の暗さかな

盂蘭盆会うづきだしたる親不知

秋扇かなめいささかゆるびをり

橋脚をふさぐ倒木鬼やんま

秋霖に蠟石の文字消えゆけり

猿酒に酔うて葉守の出で来むか

京都 大濱たい子

東京 鈴木れい香

東京 しのぎ智子

猫たちの踊りだすやも星月夜

耳たぶのピアスにしたき芋の露

初秋や削り直して立つ柀目

杖を曳く夫に貸す手や鱗雲

伊吹山黒々更くや落し水

持て余す螺鈿の文箱西鶴忌

気塞ぎを打ち負かしたる大西日

子のあやす赤子の背^ナやいわし雲

竿先のかろき当りや秋澄みぬ

猿もまた両手見つむる秋の風

空蟬の風をつかみて裏返る

得し恋と失ひし恋桃熟るる

犬一匹を葬りし庭秋没日

深々と鈴虫の闇濃かりけり

埼玉 櫻井 理恵

山梨 川井真理子

岐阜 杉山乃ぶ子

